「動物哀歌」の詩人
村上昭夫の肖像 ⑪

小泉とし夫

■日の丸と君が代と

昭和史をひらけば、十四年間の戦争を重くとらえ、国民が戦争にまきこまれ、おし流されてしまった歴史について語っている。昭和二年生まれの昭夫やわたしたちは、そうした昭和史をもろに受容して育った世代だった。四歳で満州事変、十歳（小学五年生）で日中戦争、十四歳（中学三年生）のときに太平洋戦争が勃発したのでした。

学校でわたしたちは、天皇のご真影と教育勅語に、がんじがらめになり、皇国民意識や愛国心を注入されてきました。とくに、昭和十六年三月一日に「小学校令」が「国民学校令」になると、それまで道徳規範だった解釈が一変して「教育ニ関スル勅語ノ趣旨ヲ奉体シテ教育ノ全般ニ亘リ皇国ノ道ヲ修練セシメ特ニ国体ニ対スル信念ヲ深カラシムベシ」（「国民学校令施行規則」第一条一項）となった。

さらに橋田邦彦文部大臣は、「皇国ノ道ニ則リテ教育ヲ行ウトイウコトハ…歴史的段階ニ於テ言ウナラバ、大東亜戦争ノ目的完遂ニ挺身シ得ルガ如キ国民ヲ練成スルトコロニ在ル」と、教育勅語と戦争政策の一体化を強調しているのです。

こうしてわたしたちは、教育勅語と君が代と日の丸を、骨の髄までしみこませて、軍国少年に仕立て上げられたのでした。昭夫の初期の詩稿「国と涙と」は、そうした背景をふまえて、はじめて理解される作品と思われる。

国歌を聞いて涙が出た
「きみがよ」はいやだと思う
何処でふりむいても血痕が消えないでいるから
悪い夢が離れないでいるから
それなのに涙が出た　どうしたのだろう
もうなんにも愛したくなんかは
なかった筈なのに
この国でどんなにつらい目に逢っても
なおもこの国に流す　涙なのか
国歌を聞いて
ぼろぼろと涙がこぼれたのだ
（詩稿ノート「荒野とポプラ」より）

熊のなかで

私は熊の爪割れた爪先のなかで
生存しているのだ
私は熊の青黒い背中のまるみのなかで
朝の食事を終えたのだ
私は熊のわびしい茶色の眼のなかで
私の性を汚したのだ
やがて私は
熊の小きざみにふるえるおえつのなかで
私の一生を終えるのだ
（詩集「動物哀歌」より）

「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像 ⑫

小泉とし夫

■殺伐とした旅立ち

昭和十六年十二月八日、米英軍と戦闘状態に入り、太平洋戦争に突入したが、やがて戦局の悪化に伴い、物資も労働力も不足してきた。

その補充のため学生たちは学園外に駆り出され、落ち着いて学ぶという時間をもぎとられていった。

昭和十八年六月になって政府は「学徒戦時動員体制確立要綱」を発令。動員日数を在学期間の三分の一まで大幅に延長し、学業どころではなくなった。四年生だった昭夫もわたしも、黒石野射撃場の整地作業でモッコを担ぎ、不動村の農家に宿泊して田の草取りをする毎日だった。

大学生の学徒出陣が開始されたのは、その年の十二月のことだった。昭和十九年になると「緊急学徒勤労動員方策要綱」「決戦非常措置要綱」「学徒勤労令」「戦時教育令」などの法令・要綱・通牒がやつぎばやに出され、三月二十九日に閣議決定された中学生の勤労動員大綱により、わたしたちは通年動員となり、三学年以上の授業は完全に停止してしまった。昭夫もわたしも中学五年の春を迎えていました。

やがて、岩手中学勤労報国隊が結成され、六月には四年生が県内の久慈鉱山に出動し、七月には県外軍需工場への動員命令が出され、わたしたち五年生六十三人が横浜市日本鋳造鶴見工場に出動することになったのです。出発は七月十七日でした。

その日は、朝のうち少し霧雨模様だったが、昼近くから晴れあがるという日和で「午前十時、県公会堂には盛岡中学校、福岡中学校、岩手中学校、盛岡商業学校、岩手商業学校の各校生徒が参集して…はなばなしく各校合同の壮行会が行われ…」(『岩手近代教育史』)分列行進の後、盛岡駅に向かった。そして十二時十三分発の臨時列車に乗車したのでした。

昭夫とわたしは、たしかにその臨時列車の車中にいたことは間違いない。

わたしたちは旧制岩手中学校(現岩手高校)の五年生で、勤労動員にて京浜地区の鋳物工場に出動する殺伐とした青春の旅立ちだった。

(毎週木曜日掲載)

豚

悲鳴をあげて殺されて行け
乾いた日ざしの屠殺場の道を
黒い鉄槌に頭を打たせて
重くぶざまに殺されて行け

皮が剥がれてむき出しになって行け
軽いあい色のトラックに乗って
甘い散歩道を転がって行け
生あたたかい血を匂わして行け
臓腑は鴉にくれて行け
そのために屠殺場が近いのだと
思わせるように鴉を群れさして行け

人は涙など流さぬだろう
人は愛など語らぬだろう
人は舌鼓をうってやむだろう
その時お前は
曳光弾のように燃えて行け

(詩集「動物哀歌」より)

「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像 ⑬

小泉とし夫

■二重橋前の記念写真

翌日の新聞にわたしたちの出動を伝える記事と写真がでかでかと踊っていた。

「学徒は征く！光栄の生産戦場へ」の大見出しのもとに、紙面の四段約半分を埋めて写真がはめられていた。動き出す臨時列車の車窓から乗り出す動員学徒たちに、家族や学校の後輩たちが、さかんに帽子や手を振っている写真だった。

臨時列車は午後三時に一関駅からも一関中学、一関商業の五年生をのみこみ、一路、上野を目指したが途中停車を繰り返して、到着したのはなんと翌朝六時だった。西郷さんの銅像前で持参したお握りで朝食。やがて動員先の職員に誘導され電車を乗り継ぎ職場に着いた。

職場は横浜市鶴見区にある日本鋳造鶴見工場だった。日鋳は日本鋼管系列の会社で、本社は川崎市にあった。鶴見工場は、大正九年に創設された本社工場だったが老朽化したので、昭和十二年に本社を川崎市に移し、六倍も広い敷地に設備・能力を三倍以上アップした川崎工場を設けた。

この新鋭工場に比較して、鶴見工場はいかにもみすぼらい風体の工場だった。いすず自動車鶴見工場と日本鋼管鶴見造船所の狭間の谷底に、肺がやられそうな煤まみれの鋳物工場が猫の額ほどの敷地に建っていて、戦車や海防艦の部品が鋳造されていた。

わたしたちは工場の食堂で適性検査を受け、電気炉・混砂・型場（鋳型成形）・鋳型（鋳型に黒鉛塗装）・斫（ハツリ、鋳物の砂落し）・電気溶接・現場倉庫・発送・事務などの職場に配置され、わたしは型場へ、昭夫はたしか現場倉庫へ配属された。

それから十日ほど過ぎた八月二日、会社の職員の案内で東京市内見物にでかけた折に撮った記念写真がある。二重橋前の広場に四列に整列したキャビネ版で、すっかりセピア色になったこの写真に、わたしと昭夫の実在が証明されている。五十数人並ぶ豆粒の顔の、その三列目左から七番目がわたしで、その右隣に昭夫が並んでいるのである。

（毎週木曜日掲載）

坂をのぼる馬

坂をのぼる馬があった
その時馬を見つめていた人と
人の眼があった

坂をのぼる馬は
坂のために生きたという
その時村があった
町さえもまだ広く広くあった
だが坂をのぼる馬が
坂のために永劫を昇華しはてた時
馬の背にあった一切の未来は
豪雨のように流れたろう

そうして今は
のぼるべき坂もない

ただ抵抗のない白い平面が
原始のように続くだけなのだ

（詩集「動物哀歌」より）

「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像 ⑭

小泉とし夫

■動員生活の一日

宿舎は紫雲寮という新築された校舎のような木造二階建ての施設だった。わたしたちの部屋は、玄関のフロントの左側の一階にあって、廊下を挟んで五室ずつ部屋が並んでいた。鳥羽口には月交替に出張してくる教員の部屋が、集会にも使える二部屋分の広さがあった。

一室に五―六人が入居していた。夜九時に点呼ののち消灯、三人ずつ頭を向き合って寝た。

村上昭夫がどの部屋だったのか。だれと枕を並べたのか。級友たちはどうしても思い出せなかった。動員時代の昭夫は、やっぱり孤独のままだった。

紫雲寮には岩手中学のほかに山形師範、寒河江中学、岩手商業（現岩手橋高）などの動員学徒、各地からの徴用工たちが同居していた。寮の周りは空き地、畑が多くススキ・ヨモギが茂っていた。

この一帯は小田・渡田・浅田と呼ぶ田んぼの里の埋め立て造成地で、近くを南武線の電車が走っており川崎新町が最寄りの駅だった。そして夜半、通過する一輛電車のかぼそい警笛が夢枕に郷愁をそそった。

朝七時に川崎新町から電車に乗り、浜川崎で乗り換え、臨港線浅野駅で下車、徒歩で日本鋳造鶴見工場までのコースを往復した。

食堂で朝食をとり八時半から中庭で朝礼。監督教師の訓示、校歌や学徒動員の歌を斉唱し各自の職場に散った。

三時に茶のみわん一杯の雑炊が出た。学徒は終業五時少し前に入浴、鋳物工場の煤（すす）で汚れた襟首、鼻や耳穴を丁寧に洗った。それから夕食、皿にひっくり返したドンブリ飯と一汁一菜の前に、全員起立し「一つ軍人は忠節を尽くすを本分とすべし、一つ軍人は…」と勅諭を唱えた。ご飯にはカテものが混ざり、戦況の悪化につれてコーリャン、大豆、乾燥ニンジンとなり、みそ汁の実も乾燥ニンジンや乾燥サツマイモだった。

少年たちは慢性的な空腹を抱え、電車で帰寮する途中の安善駅で下車し、雑炊食堂の行列に並ぶ術を覚えた。雑炊ハシゴをしたあげくに帰寮時間を遅刻して教師にアブラを絞られることもよくあった。

（毎週木曜日掲載）

犬

犬よ
それがお前の遠吠えでないのか
また荒野の呼び声と伝えられる
月に向かって吠えるのだと言われる

それがお前の不安な遠吠えではないのか

お前の遠吠えする声の方向に
死なせるものや愛させるもの
別れさせるものが
目も眩むばかりにおいてあって
お前はそれを誰も知らない間に
密かに地上に呼んでいるのではないか

だがお前はひるになると
まるでそ知らぬ顔をして
尾をふったり飛びついたり
愛くるしい目を向けたりする
真実忠実な犬でしかないように
嘘の姿を見せるのだ

（詩集「動物哀歌」より）

「動物哀歌」の詩人
村上昭夫の肖像 ⑮

小泉とし夫

■寮生活のなかで

紫雲寮に帰ると、六時に点呼があって全員帰寮しているか確認が行われ、九時にも点呼の整列があって消灯就寝という日課だった。消灯までの三時間は、各部屋でめいめいが自由行動をとった。

郷里からお米やサツマイモ、リンゴなどの食料品を、下着や着替えの衣類のなかに忍ばせた慰問袋?を送ってもらい、中庭で飯盒（はんごう）炊事をし夜食をとる少年、空腹にたまりかね寮周辺のサツマイモ畑に夜襲をかける少年もいた。

最初は教科書も開かれていたが、労働の疲れと空腹に追われ、学習する気分も喪失し、トランプに興じたり、密かに携帯してきた蓄音機を囲んで洋楽を楽しむ部屋もあった。洋楽といってもクラシックではなく、タンゴなどの軽快なメロディーが夜の廊下に流れ、少年たちは疲れを癒（いや）して聴きほれたものだった。

ところがそうした密かな娯（たの）しみも、監督に派遣されたM教師によって遮断されてしまった。洋楽は、時局をわきまえぬ不届きな行為としてとがめられ、その所有者は譴責を受けたうえに蓄音機は没収されてしまった。その夜から、寮の空気はにわかに冷え込んでゆく気配がした。

しかし、監督教師によっては生活指導にだいぶ温度差があった。サツマイモ畑を荒らされた農家から苦情がもちこまれ、その際に応対した歴史のK先生は「わたしの学校には、そんな生徒は一人もおりませんと答えておいたからネ。皆の中にそんな不心得者はいないよナ」とやんわり忠告してくれた。

季節は秋になり寮の空にも赤トンボが飛び、少年たちは岩手山を包む澄んだ秋空をしきりに懐かしがった。昭夫もその一人で、未発表の詩「空」は、そんな気持ちが反映されている。

空を見れば／空しかない
空の話をして／空と笑って

空の中には／空しかない
あゝいいなあ／空を見れば／空しかない

（毎週木曜日掲載）

虎

虎にでもなろうではないか
綱渡りをする場末の虎ではない
だんだらもようのびろうどの肌で
びょうびょうと笛を吹こうではないか

山に満月がかかる時があれば
かなしく高く祈ろうではないか
おれは兎などを苦しめぬ
おれは鹿などを傷つけぬ

そしてびょうびょうと笛さえ吹けば
それこそ四次元世界への郷愁

ああ　実に虎にでもなってしまおうではないか
だんだらもようのびろうどの肌で
びょうびょうと笛でも吹こうではないか

（詩集「動物哀歌」より）

「動物哀歌」の詩人
村上昭夫の肖像 ⑯

小泉とし夫

■病気は非国民！

鋳物工場は、精密工場の旋盤工とは違って原始的で大ざっぱな作業だったが、ときには重大事故を招く危険がある。クレーンから落下した鋳型に徴用工が押し潰された事件は、少年たちに恐怖を巻き起こした。そして秋を迎えたころ、仕事の慣れからなのか、けがをするものが出てきた。

鋳物製品の整理・発送業務のS君は、製品によって太股に負傷し手術をした。ハツリ（斫）作業場のN君は、ハツリ済二百㌔もある鋳物製品が倒れ、それを無理に起こそうとして腰を痛めた。型場のK君は、鋳型をクレーンでつり上げる時、つりワイヤから鋳型が外れそうになり、思わず両手を出しワイヤの間に両指四本を挫傷した。またM君はカーボンアークによる電弧溶接の作業中に強烈な閃光（せんこう）を眼球に受け、電眼症（網膜の火傷）に罹（かか）った。取り扱うものが鉄製の鋳物なので、尖（とが）った部分が手足に刺さって傷口から化膿することがままあった。

こうした多発する傷害事故を重大視した国語のS先生は、工場長に会社の管理責任を追及し、作業基準や職場環境の改善を強く申し入れたのです。ところが「病気は気持ちの緩み」としか見ようとしない漢文のM先生のような監督教師もいた。

労働災害は、けがだけではなく職場の粉塵で肺に異常を覚え、栄養不足から原因不明の高熱を出す仲間もあったのです。

発送係のO君は、寮から出勤途中で体調がおかしくなり仲間の肩をかりて職場に着いたが、作業しているうちに意識不明に陥り、川崎市民病院にかつぎこまれた。それでもO君は二日間で退院し職場に急ぎました。

また肺が詰まるような異常を覚えた電気溶接係のK君は、倦怠感が重くて欠勤を申し出たところ、M先生は「それは、お前の気持ちがたるんでいるからだ。非国民！」と頭ごなしに怒鳴り散らした。

その後、K君は肺浸潤の診断をうけて帰郷することになりました。

（毎週木曜日掲載）

私をうらぎるな

夜を見はっているつながれた犬たち
私に向って吠えるな
私が誰なのかを知ったなら
吠えることはできないだろうに

おびえる風のなかの雀たち
私の行先から舞い立つな
私が何を聞きたいのかを知ったなら
舞い立つ必要はあるまいに

地からはい出た痛ましい虫たち
暗い穴のなかに隠れてゆくな
私が何を捜しているのかを知ったなら
隠れる必要はあるまいに

冷めたい水のなかの魚たち
私の足音が近ずくからと言って
わびしく散り去ってゆくな
私が何処へ行くのかを知ったなら
散りさることはできないだろうに

私はそれを聞きにゆくのだ
私はそれを捜しているのだ
私は其処へ行こうとするのだから
どうか私をうらぎるな

（詩集「動物哀歌」より）

「動物哀歌」の詩人 村上昭夫の肖像 ⑰

小泉とし夫

■郷里で正月休暇の噂

職場の工員たちは「岩中の学生さんはマジメで仕事熱心だ」と評判していた。鶴見工場の生産が好調である要因として、わたしたちの努力を会社は高く評価し、軍需大臣表彰を申請するという話が伝えられた。

ところが、この話に尾ヒレがついて流れたのが、報労のため「正月休暇を郷里で迎えさせる」という噂（うわさ）だった。やがて噂が一人歩きをし、だれしもが甘美な正月の夢を確信することになった。

動員学徒への報償については国による規定があり、会社から毎月学校側に支払われていた。一人当たりの報償金は五十円くらいだったらしい。会社は、この中から寮費・食費を天引きし約三十五円（一人当たり）が実質支給金額であったと推定される。わたしたちには、小遣いとして毎月五円が支給されていた。

白米の値段が四、五円（十キロ）のころだった。各自が使用する洗濯せっけん代（五十銭）、また肝油や栄養剤などの補給や郷里への通信費など、月々の固定費もばかにならなかった。それで密かに親から書留で送金を仰いでいる者もいた。

また休日の外出にも小遣いがかかった。電休日といって休日は月三回（十月から二回）あり、その日には近辺に在住する親せきのもとに食いだめにいそいそ出かける者もあったが、おおよそは職場や同室のグループで東京や鎌倉方面に出かけていった。

ライスカレー、天丼などご飯ものばかりでなく、かけそばもラーメンも昭和十六年より統制され姿を消していたから、外出の食事は一杯四十銭の雑炊しかなかった。

同室のM君が「クジラのステーキを食ってきたヨ」と報告し、仲間たちをうらやましがらせた。

こうした休日外出には往復電車賃・食事代などで毎回一円余は消えたから、小遣い五円はいつも赤字だった。

だが、どうしてか昭夫の休日の動向は同級のだれにも記憶されていなかった。寮のガランとした自室の窓から「空を見れば／空しかない」と、さびしい心を遊ばせていたのかもしれない。

（毎週木曜日掲載）

化石した牛

一言の言葉もなしに牛は化石した
かわいてゆく草原の痛みを
もう誰も知ることはできない

そして千年
今は反芻されるなにものもないだろう
鞭うたれる
きびしい雪も降らないだろう

化石した目からなおせんせんと滴る
それは泥なのか
遠い河の固まり始めた音が
かすかに聞えるのだが

化石した牛は話そうとしない
二度と歩もうとしない

（詩集「動物哀歌」より）

「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像 ⑱

小泉とし夫

■刺激的な情報に揺れる

M先生は教頭で岩中勤労報国隊の大隊長だった。まるで、戦争を一人で背負っているような気負いがみられた。九月の末、中庭の朝礼でグァム・テニアンの日本軍全滅を告げ、こんな時こそ心を引き締め生産向上に邁進（まいしん）するように、とハッパをかけるのを忘れなかった。

そして「あすからの通勤は電車をやめ徒歩にする。われわれはあらゆるムダをはぶき、聖戦遂行のために軍需生産の実をあげるよう努めなければならない」と訓示し、定期券を会社に返上させたのです。

その結果、通勤に要する時間が延びて一時間ほどになったから、いままでより三十分も早く寮を出ることになった。

しかし紫雲寮に同宿する山形師範や岩手商業（現江南義塾盛岡高校）の生徒たちは電車で通勤していたので、わたしたち岩中だけがなぜ、という割り切れない思いが残った。そんなわたしたちに同情する工員や事務員がいて、教頭先生に関する刺激的な情報をもたらしたのです。

「ムダをはぶき聖戦遂行のため生産に励め」と、ハッパをかける教頭先生は「会社の招待で宴会や芝居見物をしていますよ」ということだった。この情報は社会に通用する接待行為にすぎなかったかもしれないが、戦時中でもあり潔癖な少年たちには裏切りとしかみえず、ライオンとよばれた豪放磊落（ごうほうらいらく）の人物像も、いっぺんにしぼんでいくようだった。

情報はこれだけではなかった。「統導の先生は会社から課長の待遇をされている。生徒の出勤率や生産性によって報酬も左右する。また統制品の酒やたばこも特配されている」という内幕まで伝わってきて、定期券返上のナゾを示唆しているように思えた。

もとより情報の真偽を確かめようもなく、教頭先生と対決する勇気もなく、先生のふるまいにただ疑いをもつばかりで、彼の威圧する言動も空虚に感じられ、石桜魂を合言葉に燃えた生産意欲もしだいに冷めていきました。

（毎週木曜日掲載）

死んだ牛

牛の匂いがしてくる
死んだ牛が匂うのだ

其処は何処だかも分らなくて
ぼくらはとぼとぼと歩いていて
とぼとぼ歩いているのはぼくらだけではなく
だからもう幾匹目かの
死んだ牛が匂ってくる

牛がいるからには
其処は広がる大陸なのだろう
ぼくらがとぼとぼ歩いているからには
ぼくらは敗れた民族なのだろう
ぼくらは遠い昔に恋人を犯してしまって
それからはこんなに淋しくうつむいて
歩き続けているのだろう

だがぼくらはなんという恰好なのだ
戦闘帽などはすかいにかぶって
人間のひからびた形骸のように
後生大事に軍服などをつけて
敗れた悲しい思い出のうたを
何時までも夕陽のように
夕陽のようにうたいながら

ぼくらがこうして歩いているかぎり
牛の匂いがしてくる
もう幾匹かの
死んだ牛が匂うのだ

（詩集「動物哀歌」より）

「動物哀歌」の詩人 村上昭夫の肖像 ⑲

小泉とし夫

■〈正月帰郷〉はデマ？

わたしたちが中学生ながら、一般の徴用工に勝る生産の戦士だったことは、日本鋳造本社も評価していた。鶴見工場は生産設備も老朽化していたので、生産目標が低く抑えられていた。

それにもかかわらず、わたしたちが現場で作業するようになってから、予対比の生産実績が右肩上がりに上昇し、工場長は鼻を高くして本社に報告できたのです。

動員学徒を担当する本社の河野勤労課長はなんども鶴見工場に来て、わたしたちにねぎらいの声をかけたので、わたしたちは親しみをこめ目礼した。

すると河野課長は岩中勤労報国隊を軍需大臣表彰に申請している旨、にこやかに語りかけたのです。そのときだれかが「大臣表彰より正月帰郷のほうがいい」と、河野課長に聞こえよがしにつぶやいた。

実際、わたしたちの欲しいのは大臣表彰ではなく「生産増強に協力してくれれば、正月を郷里で迎えさせてくれる」といううわさの履行だった。ところが課長はそれを無視して立ち去ったから、なにか不吉な影を感じたが、それでも正月帰郷の実現をだれもが疑わなかった。

ところが十二月初め、監督に来寮した教頭先生が全員を広間に集め「正月帰郷のうわさは、全く事実無根だ。そのようなデマを流した者も知っている。ノンキに正月帰郷させるような時局ではない」と、頭からピシャリと引導を渡されたので、あ然とし声も出なかった。そして、わたしたちの中で教頭にタレコミをしている者がいるらしい気配が濃厚に感じとられた。

合言葉だった〈正月帰郷〉は、わたしたちの勤労意欲をそそる大人たちの外交辞令だったと悟ったわたしたちは、教頭に悟られぬように密議し、河野課長を工場の食堂ホールに来てもらい会社と対決することになった。

学徒の動きを察した工員の中には敏感に反応し、戦前の鶴見工場の労働争議で煙突に登って気勢をあげた有名な煙突男の話を語る者も現れた。

わたしたちが会社と交渉するのを並々ならぬ関心をもって見守るようでした。

（毎週木曜日掲載）

じゅうしまつ

じゅうしまつはふいに部屋にやってくる
じゅうしまつは病んだ人の飼う鳥だ

隣りの部屋では
じゅうしまつを人に踏みつぶされた女の人が
髪をふりみだして泣いた
下の草はらでは
めでたい日に美しい着物も着れない少女が
じゅうしまつとたわむれて遊んでいる
じゅうしまつは逃げる少女に
幾度も幾度も追いついてゆく

既に病んだ人には
じゅうしまつははっきりとその姿を見せる
病みかかっている人には
じゅうしまつはその僅かな声を聞かせる
そしてまだ病まない人には
じゅうしまつはそのまだ見えない姿を
かすかに覗かせるのだ

（詩集「動物哀歌」より）

「動物哀歌」の詩人 村上昭夫の肖像 ⑳

小泉とし夫

■職場放棄し会社と対決

わたしたちは、もはや後にはひけなかった。かねて申し合わせの通り仕事を一斉に放棄し、全員が食堂に集合して横一列に整列し河野勤労課長を待ち受けた。昭夫も一緒に並んでいました。

河野課長は大柄な押し出しのいい男だった。アゴの具合がどこか俳優の山形勲に似ていたが、眼鏡をかけ馬ヅラなのが気になった。その馬ヅラ課長が、ヌッと食堂ホールに現れ、わたしたちと向き合った。一瞬の間をおいて、わたしたちの級長N君が口火を切りました。

N君は、七月の動員からきょうまでの間、国家の要請を受け、身命を賭（と）して軍需生産に邁進し、大臣表彰に値するほどの実績をあげてきた経過を縷々（るる）と述べてから「それもひとえに〈正月帰郷〉の夢に支えられてきたからできた」と述べ、正月帰郷の実現を強く要請しました。

これに対して「会社は正月帰郷について皆さんに約束した覚えがない。そのような流言を会社は一切関知しない」と釈明し、正月帰郷につながるわたしたちの夢の糸をバッサリ切断してしまった。河野課長はさらに「皆さんはなぜ仕事を怠けるのか」とたしなめ、職場離脱するようでは大臣表彰も取り下げざるを得ない、と脅かす発言をしたので、わたしたちも一斉に反撃した。

「会社は軍需用ばかりでなく民需用製品まで生産させているというのではないか」と数名の声が課長に迫った。それは、職場の工員たちから入手した情報だった。それをN君がひきとり「わたしたちは、お国のために軍需物資を生産するため生命がけで働いている。しかるに、会社は不正にも平和物資を生産しているというわさがある。そのようなものに、われわれは手を汚すわけにはいかない」と堂々たる正論をつきつけたのです。

すると課長は声を落とし「それは誤解だ。だれが根も葉もないデマを流したか知らぬが、そんな事実はない。会社を信頼してください」と、眼鏡を外し涙をふくようなしぐさをして、弁解するばかりでした。

（毎週木曜日掲載）

駱駝

世の創生と共に
駱駝は瘤を負って歩いてきたのではあるまいか

およそ砂漠という砂漠と名の付く所に
ひとつの瘤の駱駝が
ふたつの瘤の駱駝が
背中じゅう瘤だらけの駱駝が
何時も苦しく歩いているのではあるまいか

瘤をひらけば
ささやかな脂肪と
ささやかな水分に過ぎないのだが

紅の砂漠には紅の冷めたい駱駝が
白い一面の砂漠には白い一面の駱駝が
橙色の砂漠には橙色の寒い駱駝が

およそ砂漠という砂漠と名の付く所に
ひとつの瘤の駱駝が
ふたつの瘤の駱駝が
そして背中じゅう瘤だらけの駱駝が
とても苦しく
歩いているのではあるまいか

（詩集「動物哀歌」から）